

ラブホテルの形態及び立地とニーズの関連性

山口大学 教育学部 学生会員 藤原慧流

1、序論

ラブホテルは日本において特に発展した宿泊施設であり、これは日本文化と言っても過言ではないものであると言えよう。また、ラブホテルは常に社会の流行やニーズに合わせ変動を繰り返してきた、建設当時の様子を伺うことが可能ないわば示準化石ともいえる存在である。しかし、ラブホテルはその営業形態や性へのタブー視などから、その実態を語られることは少ない。それ故か、金一益氏による文化的な視点からラブホテルを紐解こうとしている研究や、他のホテルとは異なる変化を遂げてきたその歴史から今後を考察するものなど様々な視点から研究をされてはいるが、その論文の数は少なく包括的な研究を行えるほど推察をされていない分野の様に思われる。しかし江戸時代の「出会い茶屋」に始まり今日まで続くとされる歴史や、ビジネスホテルや旅館とは異なるラブホテル特有の内装や外観の変化という物は、日本の風土や文化に根付きながらも時代の潮流によって連綿として変遷を繰り返してきていることは明らかである。そしてこの様な事物の数々は私にとって非常に興味深いものであった。今回の試論はラブホテルに対する多岐にわたる視点を包括的に研究するにあたっての第一歩として行うものである。また、本試論の対象となっているのは山口県東部ラブホテルが主であり、全国的に見られるラブホテル全てに当てはまるわけではない事を先に述べておく。

2、定義

以降で論を進める前に、そもそもラブホテルをどう定義するのかという事を明確にしておく必要があるだろう。そこで、ここで言う「ラブホテル」とは風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律（以下風営法）において店舗型性風俗特殊営業の4号営業に当たるものであり、性行為を行う事を第一の目的として設置された宿泊施設の事を指すものとする。

3、方法

本研究を行うにあたって、今回は山口県東部におけるラブホテルのオーナーに対して実際にインタビューを行い、その内容からラブホテルの立地や建物の形態とニーズへの関連性という物を考察していく。また、今回協力してくださったラブホテルは以下のホテルを経営しているオーナーのみであった。

- ・ホテルゴールデン・アイカ・ワンダー（山口県柳井市柳井野畑）
- ・ホテルシャリマー（山口県萩市大字椿東目代）
- ・ホテルUSA（山口県山口市名田島）

4、ホテルの形状とニーズの関連性

先述したホテルの形態はそれぞれ、上からコテージ型、コテージ型、ビル型となっている。ここで注目するのが、コテージ型のある場所は各市の郊外に位置しており、ビル型のラブホテルは駅の近くであったり近辺に住宅地があったりするという点だろう。これはこの3つのホテルに限った話ではなく、山口県内のラブホテルのほとんどに当てはまることであると言える。つまり、コテージ型は顧客が車を所有している事を前提としており、ビル型の場合は徒歩で入ることを可能としており車の有無でニーズを決していないという事であろう。事実、山口県周南市にあるウォーターゲート徳山は徳山駅から約500mの距離にあり、このラブホテルには駐車場が設けられていない。各ホテルのオーナーにインタビューを行ったところ、これらの町の中に置かれているラブホテルというのは、多くの場合デリバリーヘルスやホテルヘルスといった派遣型ファッションヘルスを用いる人や、突発的な関係（いわゆるワンナイトと呼ばれる関係性）の人たちをニーズとしていることが多い様だ。逆に、郊外に置かれているラブホテルだと車で来るものが多くなり、それは突発的でない不倫関係にある人たちを主なニーズとして考えていると話していた。



・コテージ型（コテージ MW）



・ビル型（ホテル VIP's）

5、ホテルの立地とニーズの関連性

ビル型とコテージ型がどのような場所に建設される傾向にあるのかという事を先の項目で述べたが、その場所という物をもう少し詳らかにしていこうと思う。ホテル USA やウォータージェット徳山といったホテルの周辺は駅前であるという事と居酒屋が多く店を構えているという事が最たる特徴であると考えられる。(図1) この特徴から考えられることは、先述していた、その場で出会った男女が性行為を行うためにホテルを利用しているという事だ。また、居酒屋から連れ立ってきている場合は車の使用ができないという事でもある。つまり、このような施設周辺にあるラブホテルは居酒屋などから流れてくる顧客を迎えるという目的を持った視点が多いものであると予測できる。また、用途マップを確認すると準住居地域に分類されており、この地域にはソープランドやヌードスタジオと云った風俗店を置くことが禁止されている。つまり、この地域で性行為を行う施設としてラブホテルという存在が一役を買っていると考えられよう。



・図1 <https://onl.la/4EncK76>

次にコテージ型についてだが、この形態のホテルは先述しているように郊外に位置していることから、顧客が車の保有をしていることを前提としている。また一口に不倫関係にあると云っても、その後に性行為に及ぶことが前提であるか否かという違いがある。そして、フロントなどを通る必要のないという点や、郊外であるが故の人の目が少なさという理由から、コテージ型の場合は前者であることが多い。つまり、対面をしないという事がコテージ型では重要視されているのだ。よって、このようなラブホテルでは、先のニーズに応えられるサービスの提供や、そもそもサービスを行っていないという場合がある。

6、結論

ラブホテルには様々な形態が存在するが、それはホテルが建てられている地域ごとに顧客から求められている営業形態という理由があり、顧客のタイプによって棲み分けが行われていると予測可能である。

また、今回の試論はあくまで山口県東部におけるものだけであり、他の地域との差という物は考慮されていない。今後に必要な事は、多くの地域のラブホテルにおける在り方を子細に分類し整理することで、地域ごとの特色や相違点を明瞭化する事であろう。

また、本試論を行うにあたって協力をしていただいた各ラブホテルのオーナーの皆様及び、協賛して下さった学生団体 BEAST 様への感謝をこの場を借りて申し上げさせていただきます。

7、参考文献

- ・「性愛空間の文化史―「連れ込み宿」から「ラブホ」まで―」（ミネルヴァ書房）金一益